

教職課程
自己点検評価報告書

令和5年3月

東京農業大学農学部

目次

I	教職課程の現況及び特色	1
II	基準領域ごとの事例点検評価	3
	基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み	3
	基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援	5
	基準領域3 適切な教職課程カリキュラム	7
III	「教職課程自己点検評価報告書」作成のプロセス	9
IV	現状基礎データ票	10

I 教職課程の現況及び特色

1 現況

(1) 大学名：東京農業大学 農学部

(2) 所在地：神奈川県厚木市船子 1737

(3) 学生数及び教員数（令和4年5月1日現在）

学生数：教職課程履修者数 266 名／学部全体 2,339 名

教員数：教職課程科目（教職・教科計）担当 74 名／学部全体 82 名

2 特色

本学部は、環境、生物の多様な機能、生産農学に対する基礎的な理解をもとに、生命科学や最新の技術を取り入れ、時代に即した農学の発展に資することを目的としている。特に、生物多様性の保全と利用、農畜産物の生産、植物・動物及び食の持つ様々な機能の活用などの学際的な領域までを対象として教育・研究を行い、豊かな心と実学的知力を養い、国内外において地域リーダーとして活躍できる意欲と能力を持った人材を養成する。

（農学部教育研究上の目的 https://www.nodai.ac.jp/about/guide/edu_policy/）

本学部を構成する学科と認定されている免許教科は下表のとおりである。

学科	中学校教諭一種免許状	高等学校教諭一種免許状
農学科	理科	理科・農業
動物科学科	理科	理科・農業
生物資源開発学科	理科	理科・農業
デザイン農学科	—	農業

上記の免許状取得のため教職課程では、教育意欲に溢れ、理科及び農業に関する専門知識を持ち、学校現場に対応できる実践的指導力を身につけた教員の養成を、全学的な協力・指導体制のもと各学科で行っている。

（参考）<https://www.nodai.ac.jp/academics/edu/monka/>

各学科の教職課程の理念等

○農学科

本学の教育理念である実学主義に基づく能動的な授業・実験を指導できる理科及び農業教員を養成するよう努めている。生命の尊さを学び、他者を思いやる気持ちを持って生徒に接し、あらゆる教育場面においても適切に対応できる教員の育成に力を注いでいる。理科教育に限らず、日頃の生活指導や環境に配慮した指導にも熱意を持って意欲的に取り組む理科教員、また、植物の栽培・動物の飼育の指導にも意欲的に取り組み、さらには地域農業の生産現場が直面している課題の解決に向けて努力を怠らない農業教員の育成をも目指している。

○動物科学科

本学の教育理念である「実学」の精神を授業に取り入れ、農業及び中等教育の理科授業や体験授業を指導できる教員を養成するよう努めている。さらに生命の尊厳や倫理を念頭に、動物の生命科学及び生産科学に関連する先端の知識や技能を習得させ、昨今の生命科学・畜産業の多様な諸問題に関して、知識だけでなく現場においても柔軟に対処できる教員の育成を目指している。

○生物資源開発学科

農学・生命科学領域の生物学を講義体系の柱として、生物学系と化学系の講義、実験を通じて、多様な自然現象を論理的に思考する能力、正確な情報を収集し分析できる力、問題解決能力、生徒に適切で明確かつ魅力的に説明できる力などの総合力を涵養し、「広範かつ強固な基礎力を基盤とした専門的知識を備え、時代に適応した課題解決能力を持った教員養成」を理念とする。

○デザイン農学科

本学科は食料問題や環境問題を中心に、個別的な課題に取り組んできた従来の農学の発想・知識・技術を総合し、持続可能な循環型社会を設計（デザイン）できる高い専門性を有した人材育成を使命としている。とりわけ将来の農業教育を担う質の高い教員養成を喫緊の課題とし、農学を基盤として農の多面的機能に関する幅広い知識と知恵を活かしながら、現代社会が直面している諸課題の総合的解決に寄与する意欲を持ち、農業教育の発展・推進に貢献する人材を養成することを目的とする。

II 基準領域ごとの教職課程自己点検評価

■基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

[現状説明]

(1) 基準項目1-1 教職課程教育の目的・目標の共有

初代学長横井時敬による本学の建学の精神「人物を畑に還す」との言葉どおり、本学は開学以来全国から若者を集め、地域に貢献する人物となるよう教育してきた。教員養成においても同様で、課程履修学生が卒業後に全国各地で教育者として活躍することを目標とし、この東京農大精神と教育理念「実学主義」のもと、豊かで実践的な知識と技能を身につけた心身ともに健全な教員の養成を目指している。今日、農学や環境科学には社会からの期待が大きい。教職課程ではこのような動向を踏まえ、学部段階では学科の基礎と教員としての基本的かつ実践的な知識と技術を習得させる教育を行う。

以上のような教職課程教育の目的・目標を学科及び取得できる免許教科ごとに大学のホームページにて情報公開するとともに、学生には「学生生活ハンドブック」やガイダンスで周知している。また、関係教職員には学科会議等において共有を図っている。

<根拠となる資料・データ等>

- 1-1-1 東京農業大学 HP「教職課程に関する情報公開」
(<https://www.nodai.ac.jp/academics/edu/disclosure/>)
- 1-1-2 学生生活ハンドブック2022
(<https://www.nodai.ac.jp/campus/e-books/HB/>)
- 1-1-3 2022年度教職課程ガイダンス資料

(2) 基準項目1-2 教職課程に関する組織的工夫

本学では、全学的に教職課程を運営する組織として、教職・学術情報課程主任（以下 課程主任）、課程所属の教員（以下 課程教員）、6学部23学科のうち各学科から選出された教員各1名、事務局長、教務支援部長、幹事3名（3キャンパスの教職・学術情報課程業務担当課長各1名）から構成される教職・学術情報課程委員会を設置している。委員会は年2回行い、課程履修学生に対する教育及びカリキュラム編成に関する事項について、各学科と教職課程との連携調整を図ることを目的としている。また、必要に応じて教職課程委員会（部門連絡会）を開催し、特定学科に関連する連絡調整を行っている。農学部の4学科からも各1名の委員が選出され、教職課程の運営を担っている。

教職課程では、教育に関する事項を審議することを目的として、課程主任、課程所属の教授、教務支援部長で構成される教職課程教授会を必要に応じて開催している。その他に、課程主任、課程教員で構成される課程教員会を毎月世田谷キャンパスで開催し、課程内の運営について審議、調整を行っている。

厚木キャンパスの教職課程の運営は、課程教員が担当学科の課程履修学生の担任となり、学生教務課と役割分担で連携を密に行い、協働体制で行っている。また、課程履修学生に

対する指導は、教職に関する科目及び教育実習視察は課程教員が原則行い、教科に関する教科は学科教員が行う。学科教員による研究室によるキャリア教育など全学的な対応を行う中で、教職課程と学部間の協働による教育体制が図られている。なお、毎年度発行する「東京農業大学教職課程 Annual Report」や本学ホームページにおいて教職課程の取り組みなどに関する情報公開を行っている。

<根拠となる資料・データ等>

- 1-2-1 東京農業大学教職・学術情報課程委員会細則
- 1-2-2 東京農業大学教職課程 Annual Report 令和4年度版
(<https://www.nodai.ac.jp/news/article/2annual-report-1/>)
- 1-2-3 東京農業大学 HP「教職課程に関する情報公開」
(<https://www.nodai.ac.jp/academics/edu/disclosure/>)

[長所・特色]

教職課程 FD・SD、教職課程 Annual Report 発行、部門連絡会、課程教員と学生教務課による情報交換・検討、など課程履修学生に対する指導や個別対応を連携して行う全学的対応・体制・環境を整えている。

[取り組み上の課題]

教職課程の運営に関して、課程教員と学科教員との連携が課題である。社会性や道徳性、教科や学科の専門性といった教員の資質の向上に向けて、課程教員と学科教員と協働体制で課程履修学生に対する教育体制を、さらに強化する必要がある。

厚木キャンパスの教職課程の課題として、現在、教職課程は世田谷キャンパスの教職課程が主体となって運営しているため、課程履修学生に対する支援に対して検討が必要である。

■基準領域2 学生の確保・指導・キャリア支援

[現状説明]

(1) 基準項目2-1 教職を担うべき適切な人材(学生)の確保・育成

基準項目1-1で示した各学科が目指す教員像に向け、1年次にガイダンスを実施して教職課程を学ぶにふさわしい学生像を周知している。教職課程では2年次に「履修カルテ」を配付し、課程履修学生は教育実習指導を通じて課程教員と面談を行い、履修カルテに記録することで課題確認を行っている。また、3年次には、理想の教師像、学校研究など教員に求められる資質・意欲・関心を確認するレポート提出の機会を設けている。なお、本学では3年生修了時点までに、教職概論、教育原理、教育課程論、教育心理学、生徒進路指導論の単位を修得することを教育実習派遣要件に定め、教職課程の基礎を習得した学生を教育実習に派遣することとしている。

本学部では、理科免許状と農業免許状のコース（デザイン農学科については農業免許状のコースのみ）を設け、学士プログラムの中に両免許の授業科目を配置していることを規程に定め、学科ごとの履修モデルを体系的に学習することにより理科・農業の教員を養成する。

<根拠となる資料・データ等>

2-1-1 履修カルテ

2-1-2 教職課程履修案内2022

(2) 基準項目2-2 教職へのキャリア支援

農学部は各学科が担任制を導入し、各担任が学生のキャリア支援をしている。3年次以降は全学生が研究室に所属し、研究室において学生のニーズや適性を把握してキャリア支援を組織的に行っている。

課程教員は、3～4年次の前学期に課程履修学生全員を対象として個別面談を行っている。面談では、自己の教員への適性或教員を選択した後の不安など、全体指導では伝えることが難しい内容が多いため、大きなニーズがある。また、理科教育研究室においては、キャリアセンター同様の進路相談室としても機能しており、課程履修学生が面談の時間以外にも相談に訪れることができるよう設置している。課程履修学生が早い段階から教育現場を体験するためにも、東京都、埼玉県などの教育委員会による教育ボランティア説明会を実施し、学生の積極的なボランティア活動への参加を推進している。さらに個別面談等を通じて自己評価・学習達成度及び課題の確認を補完しながら、次年度の履修に向けた心構え及び教員としての資質を考えさせる機会を設けるといったキャリア発達の促進を促している。

教職課程では、3年次の夏から4年次の夏まで30回の教員採用試験対策講座を企画し、教員養成の充実を図っている。また、外部講師によるキャリア講演、中学校の授業見学、教員採用試験に合格した課程履修学生を対象とした現地演習を教育委員会と連携して企画するなど、教育実習では学べない授業以外の経験も積ませている。

<根拠となる資料・データ等>

2-2-1 2022年度学部・学科・課程紹介

2-2-2 東京農業大学教職課程 Annual Report 令和4年度

(<https://www.nodai.ac.jp/news/article/2annual-report-1/>)

[長所・特色]

各学科では、個別面談を通じて学生1人1人のキャリア発達を支援し、本人の特性に応じたキャリアを学科教員とともに考え、支える場を設けている。

[取り組み上の課題]

質保証・向上を目的とした課程履修学生の評価基準の設定が課題である。学生が教職課程を履修するにあたり、最低限の知識と技能を有しているかの確認、教員としての質を担保するために履修条件としての評価基準を定めることである。現在、各学年に対して設定することを検討している。また、本学部は、教職課程履修者が他のキャンパスより多い傾向にある。そのため、講義の中で実施する「模擬授業」も希望者のみに限定されていることから、「模擬授業」を一度も経験することなく教育実習に臨む学生に対してフォローアップ体制の改善が課題である。また、教育実習において提出が必須である「学習指導案」も講義の中でより深く学ぶことや添削指導を充実させることが課題である。

■基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム

[現状説明]

(1) 基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

研究室における実験を中心とする諸活動、学会発表等の体験的・実践的な活動及び卒論研究を通じた問題の発見とその解決方法を見出す訓練を行っている。学生の研究においては ICT 機器を活用して情報活用能力を育成している。

農学部では 1 年次共通科目の「農業実習」において、農学的視点を伸ばす実習やフィールドワークを積極的に取り入れ、「基礎演習」及び「共通演習」において課題解決型学習 (PBL) やラウンドロビンなどの手法を取り入れたグループワークやディスカッションの後にプレゼンテーションなどを行い、学生自らの主体性、社会的判断能力、課題解決能力などの萌芽を促している。さらに 4 学科それぞれの専門科目においても PBL を取り入れ、「農」を取り巻く環境における諸問題や実際の人間生活に関わる社会的課題を発見し、解決する課題解決能力を伸ばしている。さらに 3、4 年次では実例や実態をもとにディスカッションやディベートを取り入れた科目も開講し、より実践的で高度なアクティブラーニングを展開している。

教職課程では、教職課程の質的水準に寄与するコアカリキュラムについて、履修カルテの内容を踏まえて系統的・体系的なカリキュラムになるよう編成している。授業はシラバスに基づいて到達目標の達成ができるように設計し、学科内の教務委員会でシラバスの内容をチェックする。課程履修学生には、コアカリキュラム及び教員等育成指標の内容を踏まえて、1 年生の段階から教員としての資質を見極める機会や体験を提供し、学び続ける教員像の確立、実践的指導力の育成を意識して様々な取り組みを実施している。

<根拠となる資料・データ等>

- 3-1-1 2022 年度学部・学科・課程紹介
- 3-1-2 履修カルテ
- 3-1-3 教職課程履修案内 2022

(2) 基準項目 3-2 実践的指導力養成と地域との連携

各学科では、実践的指導力の養成として、学科専門科目知識から基礎的な知識を学習し、実験実習及び卒業論文を通じて、教科に関する専門的な知識やスキルを習得させている。また、教職課程において学習指導案作成の指導、大学行事として学内避難訓練を通じた防災教育及び救命講習を実施している。また、地域行事や災害時における地域へのサポートなどの機会を設けている。さらに小中学校での教育ボランティアに関して地域へのサポート、小中学校での教育ボランティアなど地域の教育委員会と連携協力体制が構築されている。その他に近隣の高等学校と高大連携事業を行っている。

<根拠となる資料・データ等>

- 3-2-1 2022年度学部・学科・課程紹介
- 3-2-2 免許状更新講習テキスト
- 3-3-3 教育ボランティア説明会資料

[長所・特色]

本学部では、学科毎の専門的知識や技術を実験実習科目を通じて習得し、3年次からは研究室活動を通じてより高度な専門性を身につけている。また、教育ボランティア活動を通じて、教育現場における実践力の養成にも力を入れている。

[取り組み上の課題]

ICT教育の実践的指導力と活用の強化が課題である。学校教育現場でICT教育の充実化が目指されていることを鑑み、ICTのスキルを身につけるにとどまらず、ICTを活用した効果的な授業の在り方、学校不応適や特別支援教育が必要な生徒へのICTの活用、校務セキュリティへの活用などを含めた情報の力の向上を目指すこととその支援体制・環境の強化のため、一層、教育の充実を図る必要がある。本学部では実験実習科目及び講義を通じて、教員として求められる実践スキルや科学的視点を習得する取り組みを行っているが、教職課程を履修する学生が多いため、多くの学生が豊富な経験を得られる環境整備や実践力及び応用力向上を図るための教育拡充が必要である。

Ⅲ 「教職課程自己点検評価報告書」作成のプロセス

本学教職課程の全学的組織である教職・学術情報課程委員会において、自己点検評価の実施及び報告書作成までの手順・スケジュールを検討し、以下の作成プロセスを策定した。なお、本プロセスは、大学設置基準に基づく全学自己点検評価委員会とも情報共有し、常に点検及び見直しを行う。

第1プロセス（令和4年5月）

教職・学術情報課程委員会による自己点検評価の実施内容等の決定



第2プロセス（令和4年6月）

教職課程、担当事務所管（教務課・学生教務課）による法令由来事項の点検等の実施



第3プロセス（令和4年6月）

学部教職課程委員会と学科による自己点検・評価の手順等の確認



第4プロセス（令和4年7月～11月）

自己点検評価の実施



第5プロセス（令和4年12月）

教職・学術情報課程委員会による自己点検・評価報告書の承認



第6プロセス（令和5年2月）

自己点検評価報告書の公表



第7プロセス（令和5年3月）

自己点検評価報告書によるアクション・プランへの反映

IV 現状基礎データ票

令和4年5月1日現在

設置者：学校法人東京農業大学					
大学・学部名称：東京農業大学・農学部					
学科の名称：農学科、動物科学科、生物資源開発学科、デザイン農学科					
1 卒業者数、教員免許取得者数、教員採用者数等					
① 昨年度卒業者数					543 人
② ①のうち、就職者数 (企業、公務員等を含む)					404 人
③ ①のうち、教員免許取得者の実数 (複数免許取得者も1と数える)					67 人
④ ②のうち、教職に就いた者の数 (正規採用＋臨時的任用の合計数)					21 人
④のうち、正規採用者数					15 人
④のうち、臨時的任用者数					6 人
2 教員組織					
職階	教授	准教授	講師	助教	その他 ()
教員数	46 人	16 人	0 人	17 人	